

2006年度

新潟大学国際センター 年報

Annual Report
of Niigata University
International Exchange Support Center
2006



宮田 春夫

研究テーマ：環境と開発に関する南北関係

多様な主体が多様な役割を果たす複合的相互依存の国際社会において、環境と開発のための南北関係はどうあるべきか、全地球的レベルから地域共同体レベルまで、また、多国籍間協力、二国間協力を包括的に捉えて、政策のあり方を探っていきたいと考えています。

また、教育においては、理論と現実の両方を見ることにより、理論を現実に即して理解すること、また、対応を理論に基づきつつ現実に即したものとすることができる学生を育てたいと考えています。

所属学会：国際開発学会、環境科学会、International Studies Association

新潟大学ウェブサイトの研究者総覧のページ：

http://researchers.adm.niigata-u.ac.jp/public/MIYATAHaruo_a.html

1. 授業

(1) 本学における授業

「教養教育に関する科目」及び課題別副専攻「平和学」の授業のほか、農学部、理学部及び現代社会文化研究科の授業も担当しました。学部レベルで英語で開講している教養教育に関する科目は、短期交換留学プログラム科目としても重複指定しました。そのほかにも、課題別副専攻「平和学」及び「環境学」に指定されている科目があります。

本学に採用後、平成 17 年度は実質的に初めて一般の授業を行い、18 年度は、17 年度に非公式な勉強会として始めた「開発」概念の勉強会を授業として位置づける等の拡充を図りました。しかし、効率等にまだ不十分な点がある一方、科目数の増加、複数教員分担授業でのコーディネート等の役割の追加等により、授業負担が過大となりました。そのため、19 年度には、非公式勉強会の更なる授業化等による更なる拡充を図る一方で、授業の合理化も図ります。

その他、開発途上国の開発問題に関心のある学部生・大学院生のための「開発」概念の授業の延長として、「開発」概念を明確にした Amartya Sen の「Development as Freedom」の勉強会を主宰しました。この勉強会も、2007 年度には、副専攻「平和学」の科目として正式開講します。

授業内容や参考資料等を、下記 6 のウェブサイトに掲載し、学生の予習、復習、プレゼンテーション等に役立つようにしています。

本学における担当授業一覧

開講期	授業科目名	備考
春	Environmental Policies in Japan: The history of the environmental problems and development of policies	教養教育に関する科目。短期交換留学生用開講科目、課題別副専攻「環境学」科目としても指定。 明治から現在に至る日本の環境問題の歴史と政策の展開。

	The North-South Relations for the Environment and Development: An Introduction	<p>教養教育に関する科目。短期交換留学生用開講科目、課題別副専攻「環境学」科目、課題別副専攻「平和学」科目としても指定。</p> <p>環境と開発を巡る南北関係に関わる諸課題と政策のあり方。大学院レベルの内容を、学部生向けの評価方法にして開講。</p>
	国際開発協力演習 (環境と開発)	<p>課題別副専攻「平和学」科目。</p> <p>開発援助と環境の事例について、政府、非政府の援助関係者から直接話を聞く機会をも取り入れて、意図通りまたは真にそれを必要としている人に届く援助の難しさという現実を直視した上で、積極的に評価できる面を評価し、そうでない面についてはどのようにしたら改善できるのかを学生が考える機会を提供。JICAの国際協力専門員、青年海外協力隊経験者等に来て頂いて話を聞く機会も設けた。</p>
	国際開発協力論：「開発」概念	<p>課題別副専攻「平和学」科目。</p> <p>OECD 開発局の職員たちが書いた「開発」についての考え方の変遷を紹介した本（英語）を使い、どのようにして「開発」についての認識が深まっていったか、どのような背景の下に各々の開発理論が論じられたか、それぞれの開発理論がどのように開発援助等に影響したか等を論じた。</p>
	自然環境関連法規	農学部。複数教員分担のうちの条約等に関する 2 コマ。
秋	Environmental Policies in Japan: The history of the environmental problems and development of policies	春学期とほぼ同じ。
	The North-South Relations for the Environment and Development: An Introduction	春学期とほぼ同じ。
	North-South Relations for the Environment and Development	現代社会文化研究科。 環境と開発を巡る南北関係に関わる諸課題と政策のあり方。
	環境社会科学 (環境政策論)	理学部環境科学科専門科目。 明治から現在に至る日本の環境問題の歴史と政策の展開。背景の社会情勢等を詳しく論じる Environmental issues in Japan よりも政策課題を詳しく論じることに重点。

	環境問題と経済社会	<p>教養教育に関する科目。課題別副専攻「環境学」指定科目。全学の複数教員分担のうちの3コマ。「持続可能な開発とは何か」、「地球環境問題とは何か」、「エコロジカル・フットプリントと人類の福祉」について、国際関係論及び環境政策論の面から。</p> <p>今年度はコーディネーターを務めた。NGOの方に外部非常勤講師として話して頂いたことは、学生から高い評価を得た。但し、2006年度限りで閉講のため、実質400名の履修があり、このことによる負担が極めて大きかった。</p>
集中講義	開発途上国の環境と開発：事例研究	<p>教養教育に関する科目。課題別副専攻「平和学」指定科目。一種の集中講義として、9月の2週間のマダガスカル現地調査を中心に開講。国際化教育に関する調査研究の一環として、国際センターが経費を負担。</p> <p>一つの開発途上国（今回はマダガスカル）を選択し、その国の環境問題、環境政策及び開発諸課題について事前に調査し、その上で、現地の問題の現場、政府機関、国際機関及び民間団体等を訪問して、実情を調査し、帰国後、それをそれぞれの学生が報告書にとりまとめ。</p>

(2) 非常勤講師

2006年度は、本学での以上の授業に加え、冬休み中の集中講義の形で、鳥取大学農学部の専門科目「国際環境政策学」を担当しました。1993年の環境基本法により追加された「人類の福祉に貢献する」という上位目的に沿った形で内容を構成しました。即ち、複合的相互依存の視点を明らかにした上で、基礎的な課題として持続可能な開発等を論じ、個別課題として、条約、ODA等を論じました。この授業の機会に、私なりの視点から環境政策論を整理することができたため、2008年度以降に、本学の教養教育に関する科目として開講することを検討します。

なお、同大学農学部の改組に伴い、2006年度限りとなります。

2. 著作

区分	表題等	出版社等
報告	2005年度「開発途上国の環境と開発：事例研究」報告書、106ページ、2006年6月	新潟大学国際センター

3. 講演等

日、場所	講演題目	主催者等
10月26日	マダガスカルの特徴（駐日大使及び参事官による講義等の前のマダガスカル、マダガスカルとアジア、マダガスカルと新潟についての紹介）	新潟県立燕中等教育学校特別国際理解講座
2月24日	「世界の紛争」のセッションにおいて、コメンテーターとしてグローバル・コミュニティ等の視点からのコメント等	国際協力機構 JICA タウンミーティング in にいがた

4. 2005 年度に引き続きパイロット授業として国際センターの調査研究予算により実施した教養に関する科目「開発途上国の環境と開発：事例研究」の意義

「百聞プラス一見」の力。開発途上国と先進国との関係についての政策課題を効果的に理解させる上で、教室での授業や書籍による知識に加えて、開発途上国についての学生の具体的な理解が欠かせません。そこで、2005 年度に引き続き、この科目を開講し、2 週間の日程で、主にマダガスカルにおいて農村、政府機関、国際機関、開発と保全のプロジェクト、NGO、国立公園まで幅広く訪問して、実情を見るとともに、関係者の説明を得る授業を行いました。

2 回目になる 2006 年度は、マダガスカル側の関係者の協力が更に安定し、2005 年度と同様に環境事務次官が直接説明して下さるなどの対応に加えて、マダガスカルの NGO「FANAMBY」の事務所の訪問も実現しました。現地の日本関係機関の対応も更に積極的なものになり、日本大使館からの安全対策についての協力や JICA 事務所長自らの説明に加え、1 泊 2 日を要するアロチャ湖での先進的かつ複合的な JICA プロジェクトの見学の手配もして頂け、また、乳井大使は、公邸での夕食会にお招き下さいました。

この種の授業は、それほど多くの学生が参加できる訳ではありません。これは、学生の自己負担額が大きいこと（交通費、宿泊費、食費等を含む一切で約 30 万円）、多くの学生の参加の場合のリスク管理は大学として不可能であることなどによるものです。他方、大学としても、多くの学生の支払った授業料を少数の学生のために投じているという事実もあります。そのため、この授業の成果を他の学生と共有し、また、スタディ・ツアー型授業についての学内における理解を深めるため、学生、教員、事務職員等を対象にした報告会を実施することが重要です。そのような認識の下、2005 年度、2006 年度それぞれの授業の報告会を、学外の方にも開放する形で開催しました。しかしながら、これまでのような、授業期間中の平日に 1 回限りの報告会では、他の授業との重複のために参加できない学生もあります。このような問題に対処し、また、ホームページの作成等、他の方法も組み合わせて、より多くの学生等と経験を共有できるようにする必要があります。

2006 年度も、一般の「教養教育に関する科目」からの経費の配分が無いいため、センター教員会議にお願いして、国際センターの任務のうちの「国際連携、国際化教育及び留学生教育に係る調査研究」の一部のパイロット事業として位置づけ、国際センターが経費を支出することを認めて頂きました。しかしながら、国際センターでは 2006 年度以降の実施を認めないとしているため、今度どのように実施するかが重大な課題になっています。

現地訪問日程

9 月 8 日（金）	新幹線、京成電鉄を乗り継いで成田空港へ。ユナイテッド航空でバンコクへ。更にマダガスカル航空の夜行便に乗り換え。
9 日（土）	アンタナナリボ着。 町の散策、スーパーマーケットや市場をのぞくことなどで、町に慣れる。
10 日（日）	ツィンバザザ動植物園（アンタナナリボ市内）
11 日（月）	朝一番に、日本大使館に伺い、予定表等を提出するとともに、最新の治安情勢等の話を伺う。その後、タクシーで、マダガスカル自然保護区管理協会（ANGAP）へ。午後、JICA マダガスカル事務所へ。今年も、外川所長自らがパワーポイント等で説明して下さる。その後、更に、マダガスカルの NGO の FANAMBY へ。

12日（火）	<p>環境・水・森林省へ。今年も事務次官が自らパワーポイントで説明して下さる。</p> <p>午後、国連広報センター。</p> <p>夜は、日本大使公邸で、乳井大使主催夕食会。大使からマダガスカルの開発についての御意見等を伺った後、アンタナナリボ大学等で長年日本語を教えている方及び神戸大学で経済学の学位取得された大統領府経済部長との夕食会。</p>
13日（水）	<p>FANAMBY が実施を担当している GEF/UNDP プロジェクトを見学（自然林保護と隣接地の農民収入増加策）（首都から 90 キロの農村）。今年も、道路終点のアンジュズルベの小さな食堂で典型的なマダガスカルの食事（東南アジアと同じに、米飯におかずを乗せて食べる。）をとる。</p>
14日（木）	<p>JICA の開発調査プロジェクト「アロチャ湖南西部地域流域管理計画及び農村開発計画」（2003-07 年）訪問。途中悪路でパンクする等したため、到着は午後 3 時になる。町の食堂で遅い昼食の後、松本プロジェクト・マネージャーから、プロジェクトの概要の説明を得た上、プロジェクト地等の見渡せる丘で更なる説明。</p> <p>夕食は、プロジェクト・チームの全メンバー（日本人、マダガスカル人混成）と。</p> <p>たまたま私用でこの郷里に戻ってきたアンタナナリボ大学の Lalaina 教授（前環境事務次官）がホテルに尋ねて来て下さり、学生交流等の希望を表明。</p>
15日（金）	<p>松本さんの案内で、多数ある活動のうち山火事対策の組織作り、改良かまどの普及事業、養魚の振興策等について説明頂く。途中では、レンガ造り等も見学。</p> <p>昼食後、アンダシベ・マンタディア国立公園へ。</p>
16日（土）	<p>動植物保護と入園料収入の半額の地元開発プロジェクトへの還元、外貨獲得等で大きな役割を果たしているアンダシベ・マンタディア国立公園を見学の後、アンタナナリボへ。</p>
17日（日）	<p>アンタナナリボ付近に派遣されている青年海外協力隊員 2 名と昼食をとりながら懇談。</p>
18日（月）	<p>アンタナナリボ発、バンコク着</p>
19日（火）	<p>国連環境計画アジア・太平洋地域事務所、FAO アジア・太平洋地域事務所。その後、FAO 近くの栈橋から、古くからのバンコクの交通路であるチャオプラヤ川の定期船に乗って新交通システムの終点に行き、そこからその電車でホテルに戻る。</p> <p>午後 9 時頃（日本時間午後 11 時）、クーデター発生。町には特に異状なく、現地放送局も報道せず。しかし、英国 BBC の衛星テレビが報道したために、その事実を把握。その後、BBC の放送も、23:55（現地時間）に突然終わってしまった。日本時間深夜になっていたため、電話連絡は控え、携帯メールで連絡しようとするが、発信できず、翌朝に更に対応を試みることにする。それに先立ち、学生たちには、クーデターの事実と、親から連絡等のあった場合には無事を伝えるように助言。但し、1991 年のバンコク勤務時の同様のクーデターの経験もあり、しかも、日本からの心配の電話で初めて発生を知った前回と異なり、今回はバンコクで自ら情報が得られたため、大きな不安はなし。</p>

20日（水）	<p>前日に送付できなかった携帯メールが送信でき、大学に報告が入ることとなる。その中で、タイ国内では情報が得られないため、情報を欲しいとしておいたのに対し、日本の外務省の情報等を得た。午前6時過ぎには、タイ人の友人たちから電話が入り、軍隊が押さえている具体的場所についての情報、それらの場所には近寄らないほうがよいとの助言、緊急の場合の携帯電話の番号等を知らせてくれた。</p> <p>学生には、携行していた大学の携帯電話から親に電話を入れさせた。その後、インターネットカフェで、NHKの報道内容、帰国便のユナイテッド航空がその日の朝も通常通りに出発し、翌日も平常通りの運行予定であること等の情報を確認。しかし、官庁は閉鎖、国連ビルも閉鎖となったため、この日のそれらの機関の訪問もできなくなった。</p>
21日（木）	<p>検問等もなく、円滑にバンコク空港到着。成田空港で荷物を受け取ってホールに出たところで、携帯メールで大学に報告。京成と新幹線乗り継ぎ、新潟帰着。</p>



横路のバンコクでの乗り換えの際、マダガスカルから東京農工大学への国費留学生（右端）に出会う。



アンタナナリボの市場。食事、川での洗濯、公共交通等、マダガスカルの人々の日常生活に触れることも重要。



アンタナナリボ市内のツィンバザザ動植物園を訪問して、マダガスカルの人々の休日の過ごし方を学ぶとともに、同国の動植物についても学ぶ。



日本大使館を訪問して、安全対策を図る。



特殊法人のマダガスカル自然保護区管理協会を訪問。



JICAマダガスカル事務所では、今年も外川所長が説明下さる。



環境省訪問では、今年も事務次官がパワーポイントで説明して下さい。



乳井大使は、公邸での夕食会に招待して下さい。会食の前に、マダガスカルの開発について、大使から伺う。



アンジョズルベの小さな食堂で、一般的なマダガスカルの食事をする。



アンジョズルベ近くの残存自然林プロジェクトは、地元の人をガイドにするとところまでの展開を見せていた。



アンジョズルベのプロジェクトを UNDP 他に代わって行っている FANAMBY の現地事務所。



アロチャ湖流域での JICA プロジェクト見学に向かう途中でパンクしてしまった車。



アロチャ湖プロジェクトでは、リーダー自ら説明下さる。



アロチャ湖プロジェクトの実施にあたっている日本人・マダガスカル人混成チームの皆さんとの夕食。



アロチャ湖プロジェクトでは、改良かまどの普及など、従来 NGO が行っていたような活動も取り入れている。



アンダシベ・マンタディア国立公園見学。



青年海外協力隊員達と昼食を共にしながら懇談。



バンコクで FAO の樫尾森林官を訪問。



新潟大学の学生向け広報誌 2006 年 12 月号の国際関係の仕事の特集において、この授業が最初に取り上げられるとともに、表紙にも登場。

4. 開発途上国との協力、開発途上国の実情等を知り、同じ人類社会の未来を共有していることを理解するための講演会等

開発途上国との協力、開発途上国の実情等を知り、同じ人類社会の未来を共有していることを理解するため、実際に協力に従事している方等から講演等して頂いて具体的な知識を得る会を、一部については課題別副専攻「平和学」の開講科目「国際開発協力演習（環境と開発）」とも関連付けつつも、その科目の履修生以外にも開放し、また、特に意義があるものについては学外にも開放して企画・開催しています。多くの場合、テーマは、開発途上国との協力に関心を持っている学生たちの希望を考慮して選定しています。

(A) 学内の講演会等

(1) JICA 国際協力専門員

国際協力機構（JICA）の「出前講座」（職員等を講師として派遣する制度）を利用して、7月18日、長く技術協力に携わってこられた JICA の中村一夫国際協力専門員に、学生から希望の出ている「プロジェクトの発掘からフォローアップまで」をテーマに、講義をして頂きました。

国際協力専門員として携わってきた具体例に基づく講義内容及び開発途上国の人々の支援に対する同専門員の変わらぬ熱意に加え、様々な学部・研究科の学生及び教員・職員約20名の出席が、大変多くの質問もし、大変有意義な勉強会になりました。

(2) 青年海外協力隊経験者

7月25日、JICA の「出前講座」を利用して JICA の柄沢友理・国際協力推進員（新潟担当）（かつてニカラグアに青年海外協力隊として派遣）に、また、学内のボランティアとして、自然科学研究科博士課程（建築学）後期3年の本多良政さん（ブータンに建築学で派遣）に、協力隊経験及びそれぞれの派遣先の状況について講義をして頂きました。

柄沢推進員の協力隊活動は、大学での専門の国際関係論以外のことを任務としつつも、地域のニーズを的確に把握した上で、JICA や日本の援助関係者に加えて、他国の援助機関、国際機関、NGO 等の協力を実現することにより大きな成果を挙げたことを示すものでした。他方、修士課程修了後に6年間の実務を経て中央官庁に派遣された本田さんの場合は、専門を大きく活かした活動を行った経験でした。このようにして、異なる青年海外協力隊経験から、学生たちの得たものは大きく、この会も、様々な学部・研究科の学生及び教員・職員約20名の出席が、大変多くの質問もし、大変有意義な勉強会になりました。

(3) 新潟水俣病語り部の話を聞く会

国際協力そのものではありませんが、新潟県立水俣病資料館「環境と人間のふれあい館」の「環境学習プラン」と「語り部口演会」を組み合わせ、私の授業の履修者等のうち希望する学生が同資料館において、水俣病被害者等の経験談を聞き、併せて同資料館を見学等する機会を設けています。これまでの参加者は、主に留学生及び環境専攻でない日本人学生（環境専攻の学生には、別途そのような機会があります。）で、水俣病が、健康及び経済面だけでなく地域社会の一体性の面でも大きな苦難を生じさせたことがよく理解できる機会になっています。

2006年度は、5月28日と12月17日に実施しました。

(B) 一般開放講義等

(1) ジョスラン・ラディフェラ駐日マダガスカル特命全権大使による特別講義「発展のためのマダガスカルの行動計画」

10月27日（金）、総合教育研究棟特別会議室において、ジョスラン・ラディフェラ駐日マダガスカル特命全権大使の新潟訪問（ニリーナ・ラソロ商務・経済参事官随行）の機会に、（財）新潟県国際交流協会及び新潟マダガスカル友の会との共催の下に、同大使の本学での特別講義を企画し、実施しました。この特別講義には、外務省及び国際協力事業団地球ひろばの後援も頂きました。

長谷川学長の挨拶の後、私からの導入の話題提供「マダガスカルと日本」の後、大使はパワーポイントで講義。現政権の今後5年間の開発政策を紹介などをされました。講義は英語で行われましたが、大使館が用意して下さったパワーポイントによる英訳を映写しながら行いました。質疑応答には、早川正子・長岡技術科学大学非常勤講師がボランティア通訳をして下さいました（同講師は、プロでありながら、（財）新潟県国際交流協会の国際協力ボランティアとして登録もされているため、このボランティア制度によりボランティアとして通訳して下さいました。）。

大使の講義が良い話題提供となり、「開発」を自分たち自身の課題と認識しているミャンマーの学生、ベトナムの学生、モーリタニアの学生（以上、いずれも大学院生。ミャンマーの学生は無償資金協力による法曹人材育成の枠で来ている検事、他は国費留学生）、開発人類学専攻の日本人4年生などから、世界市場への参入に当たっての課題、農業の重要性、環境保全のための措置、他のアフリカ諸国との関係等、的確な質問が出され、大使もそれに答えた結果、大変有意義な会になりました。結果的には、「講義」というよりも、後発途上国の開発のあり方についての研究会になったと言えます。

参加者は60余名でした。その内訳は、本学の学部生（開発人類学専攻学生、国際協力関係サークルメンバー等）約20名、同大学院生（主にアジアとアフリカからの大学院生）15名余、同教員（長谷川学長、坂東研究担当理事を含む。）7、同事務職員（国際協力担当）3、学外からの参加者（国際協力団体、国際協力担当の地方自治体職員、東京都内のマダガスカル関係企業職員等。在新潟韓国総領事も参加。）15名余でした。

なお、特別講義に先立ち、ラディフェラ大使は長谷川学長を表敬訪問されました。



(2) 平成17年度教養科目「開発途上国の環境と開発：事例研究」報告会

7月14日、総合教育研究棟地域・国際交流促進室で、本学学生、教員、事務職員、一般市民を対象に、平成17年度教養科目「開発途上国の環境と開発：事例研究」報告会を開催しました。参加者の多くは、開発途上国に関心を持つ学部生で、他に、青年海外協力隊経

験のある大学院生、教員及び事務職員、また、学外から、JICA 国際協力推進員他、合計約 40 名の参加を得ました。

報告会では、この科目を履修し、マダガスカルの行政機関、援助機関、農村、開発プロジェクト等を訪問した学生 2 名から、写真、図等を入れたパワーポイントを使って、マダガスカルの現状と環境と開発の問題についての見解表明等を行いました。私からの補足の後、開発途上国における開発問題やマダガスカルの直面する森林減少・土壌流出・貧困問題等についての質問が多数出ました。

(3) 平成 18 年度教養科目「開発途上国の環境と開発：事例研究」報告会

1 月 16 日、国際センター第 3 教室で、平成 18 年度教養科目「開発途上国の環境と開発：事例研究」報告会を開催しました。上記 17 年度報告会と同様に、本学学生、教員、事務職員、一般市民を対象にし、学外からも藤田純子・新潟県青年海外協力会会長、林宏雄理事も参加し、質問等して下さる等、約 15 名の参加がありました。

報告会では、この科目を履修し、マダガスカルの行政機関、援助機関、農村、開発プロジェクト等を訪問した学生 4 名から、写真を多用したパワーポイントを使って、マダガスカルの現状と環境と開発の問題についての見解表明等を行いました。私の補足の後、開発途上国における開発問題やマダガスカルの直面する森林減少・土壌流出・貧困問題等についての質問が多数出ました。

6. その他

次のところにウェブサイトを設け、授業についての詳細情報の提供等を行っています。

<http://www.isc.niigata-u.ac.jp/~miyatah/>